

イーを完成させたが、十二点のアルファベットを組み合わせるのは大変だと、ルイは6点数字の組み立てに成功した。

しかし、ルイの考え出した六点点字が、国際的な盲人用文字として認められたのは、ルイが四十三歳で永眠し、その後二十五年も経てからだそうです。

私は点字を見たことはありません。しかし、目の見えないルイが、盲人達に与えた光は、口では言い表せないほど偉大な事です。

私達、何不自由なく暮らしている者にとって、想像も出来ないほど苦勞し、自分が盲人だからこそ、このような六点点字を生み出す事が出来たのかと思ひ、点字の父、ルイ＝ブライユに惜しまない拍手を贈ってやりたい気持ちです。



3年 向後 春美

「かぎりなくやさしい花」を読んで

生命——それは神様が私たちにさずけてくれたお金では買うことのできない一番大切なものです。

星野富弘さんは、中学校の先生をしていただくころ、器械体操をしていて失敗し、首の骨をおつて、首から下が動かなくなっていました。自分の一番好きだった器械体操に、自分をうばわれてしまったのです。星野さんは器械体操をうらまらず、自分の、慎重さを失った軽はずみな行動にこうかいしたことでしよう。

それからの9年間もこの間の入院生活つらくさびしい毎日だったことでしょう。でもその暗い入院生活が変わったのは、自分の口で字や絵を書くことでした。手足が動かず自分のことは何一つできなかつた星野さんにとって、字や絵を書くことは、自分にゆいゆいもてる自信でした。

自分の命のエネルギーだったのです。

入院生活をしていると自分の本心がいやというほど見えてきました。そして、自分は、人を信じることで生きていけるようになっていたことに気がつきました。自分の心に深い傷を負わせ、自分の心をのろいました。そんな中、星野さんをやさしく見守ったのは、(も)ちろん、お母さんでもありませんが、花だったのです。花は、星野さんにやすらぎをあたえてくれました。そして絵を書き終わる時には心がかよいあうそうです。

9年間に、いろいろな人と出会い、いろいろなことを学びました。その9年間の積みかさねを土台とし、新しい人生の出発をしたのです。9年間に会った人びとの一人も忘れてはいけません。だって、たった一人、忘れただけでも、その土台はくずれていくのですから……。

私たちは今まで、身体障害者の人たちに對して、あわれ見る目で、ただ「かわいそう」としか見ていなかったような気がします。でも本当にかわいそうなのは、身体障害者の人たちではなく、「かわいそう」と思う私たちの心ではないのでしょうか。

生命——それは神様が私たちにさずけてくれたお金では買うことのできない一番大切なものです。その生命をどうするかは、自分自身なのです。もつと生命を大切に、生きてほしいと思ひます。



3年 伊藤美代子

「親とは何か」を読んで

この本は、作者とN子という女の子との文通などからできている。

N子は、私と同じ中学三年生だ。家族

でのいろいろな問題や自分のなやみなどで、いつも頭の中がパニック状態である。

今まで何一つ不自由しない生活を送っていたが、受験中心の学校での日常生活、うるおいのない家庭生活の中から少しづつはみだし、家庭や学校とはちがった世界で、何かをつかもうとあせっていたのだ。だから、この作者と会う時も香水と化粧のにおいにむせかえるくらいの姿をしていたのだと思う。早く、大人の世界にはいって、他の子とは違つぞ。と、まわりの人に認めさせたかったんだと思つ。

そんな急がなくても、今ある自分をありのままに表現すればいいのに……もう二度とこない十五歳の自分でいればいいのに！似合わない化粧をしてみたり、中学生と思えない行動をしたりして。私達の身近なところにも、そんな人達がいると思う。他校の生徒と必要以上に親しくしている者、単車や、髪形などにばかり興味を示す者。こんな人達が学校を乱して行く。といつても過言ではないと思う。しかし、自分の好き勝手にしている者と、助けを求めている者の二つに分かれていくのではないだろうか。

この作者は、助けを求めている者……つまりN子との文通で得たものをそのまま私達読者になげかけているのだらう。

N子は、家出をしたり、悲しい思い、つらい思いをしつたりしながら最後に十五歳の自分をみつけることができたのだ。N子みたいな子は、えらいな、本当は普通の女の子だったんだな。と思うが、自分のやりたい事だけして、他人の迷惑も考えずに行動する人たちは、ただのバカとしか思えない。

N子が、家出をした理由は、前にやつたテストをお母さんが勝手にN子の机の中から見つけて、取つていつてしまったからだ。N子は点数が悪かつたために、見せることができずにいつてしまったのだ。そんな

子供の気持ちかわからないなんて、ひどい母親だな」と思つてしまった。

そして、お母さんがお父さんにそれを見せてしまい、二人が「お前は、なぜできないんだ。姉さんが中学の頃は……」と言つたから、二人を心配させるために、家出をしたのだ。私がN子だったら家出することはできなかったらうけど、強く親に抗議したたらう。親のちょっとした行動から、変わつていく子達も少なくないと思う。だから、親というのは名ばかりで、本当は子供のことを、何も知らない人たちも、いるのではないだろうか。私の家族の場合、親は親らしいし、けして名ばかりの親ではないので、子供も親のことを尊敬している。つまりバランスがとれているということだ。N子の家族の場合は……。

親を尊敬するということは、ありえないようだ。でも、このままでいいのだろうか。

作者は、N子との文通でいろいろ考えさせられたと思う。私もいろいろな十五歳の心がわかつたし、驚ろいたり……。けれども、この本を読んで、良かったと思う。他の人にも、ぜひ読んでもらいたいと思つた。

N子のお父さんが交通事故で入院するという大きなできごとによって、今まで甘つたれていた自分を見つめることができたN子の心の強さなどが良くわかつたような気がする。

N子は、本当はお父さんが大好きだったんだ。でも、いつも相手にしてもらえない、さびしさが彼女を変えてしまったんだな。と思つた。

この本のおかげで、自分自身を見なすこともできたと思つている。